

介護過程を実践してみての感想

2018年11月15日 10:04

信頼関係を形成することの大切さを知った	介護過程の展開をすれば、その人に意味のある介護ができる		短所だと思ったことが、味方によっては強み	
その人を知る、何が一番大切か、何が問題かを考えること なぜなら、その人を知らないとは違和感に気づけない	気になるポイントを探し、そのポイントのみで判断することが多かった。ポイントを解釈し、統合化、文章化することが、これほど支援を明確化できることに驚いた。なぜそのケアを行う必要があるかを考えるうえで、アセスメントの重要性を実感した		固定観念をもったまましていると、その人を見る、その人を知るということをやめてしまっていることを感じた	
			その人を知ることが一番のキーポイント。その人の良いところをなかなか文章に残すことができなかったことが課題	
生きてきた時代や文化を知る、戦争をくぐり抜け「もったいない」ものを大切に 高齢者のその人らしさを考えていくためにも生きてきた時代に興味をもち、知っておくことも大切	気なるなー、なぜだろう？それが違和感でありアセスメントの出発。大切なこと。日ごろからコミュニケーションの中でアンテナをはり、気づける力を養いたい			
	お話し好きな人のなら聞きやすいが、不得意な人からの情報を集めるには、要点をつかみ、理解力と想像力が求められると思った		短期間でその人を知り計画を立てることの難しさを知った	
個別援助計画書は、明確でわかりやすい支援となる	生活歴だけでなく日常の些細な会話からも情報収集につながる		アセスメントから見てくる「その人らしく日常生活が送られる」計画書を作成するためには、解決しなければいけないことを明確にし、個人や家族の意思を尊重しなければいけないと思った	
			解決の糸口は、相手と向き合うアセスメントにある	
頑固＝こだわりがある 負けん気強い＝人より強くあろうとしている とプラス面を強く捉え、その方の支援につなげる	介護は接客業であるため、顧客と信頼関係を形成しなければ喜ばれるサービスができない			
	普段見えなかったことが所が見えるところが多くあった		課題をあげるとなると、どうしても「できないこと」に注目してしまう。日ごろから「できること」「強み」に注目したい	
人は生まれてからそれぞれ違う人生を経験し過ごし環境もそれぞれで習慣も違う。 教育課程を経て、社会人となり自立した生活を送る途中、病気になり障害をもち、できていたことができなくなると、人は弱くなる。生活の不自由さにぶち当たった時に他者の力や自分の残存能力の工夫で解決できることもある。本人では解決できないことを本人に代わって代弁し根拠を示し解決策を考える必要がある			こちらが心を開けば、利用者も心を開いてくれる「心を開く」ことの大切さを知った	
	利用者の希望を読みとく力が必要、それを実践するに他職種連携が重要		気持ちがいケアを誰もがするために、計画書があると思った	
その方のストレングスを活かした支援をしようとも、「やりたい」とご本人が思わないとできない。そのために信頼関係を形成することが必要	その人を知ることができなければ「その人らしさ」を支援できない その方の生活の全体をみなくては支援に繋がらずらい		アセスメントをしっかり行うことが大切	
			同僚と一緒に作ったが、自分の勉強不足と知識不足に気づいた	
気になるポイントがあり、情報の解釈をし、関連付け、統合化し課題と段階を踏んでいくことで、その方をより深く理解できた	私ではない「その人」の生活をよりよくしていくためには、想像ではない、より多くの確かな事実や情報が不可欠だと思った			
	どう生きてきたかを知るとは難しいと思ったが、人生の背景を知らなければ、本当はどう生きたいかを知るとは難しい		誰しも「生きている実感が味わえる毎日」を過ごしたいと思っているから、「その人」主体の個別援助計画書は大切	
幻視の利用者をおかしく思わず、幻視とともに生きる〇〇さんの受容と支援をすること			本当にこの支援で正解なのか？個別援助計画書の内容次第でまるで違った望んでいない支援を行い続けていることもある。言葉をもたない利用者に対し、何をして欲しいのか私たちが毎日観察し、ほんの少しの違いに気づき、その気づきを共有することが大切なことだと思った	
	支援が「ただのお節介になっていないか」と考える切っ掛けとなった		笑顔が見られる場面を計画に入れることで、利用者の意欲を引き出すことができた	
計画に沿った支援に囚われすぎずと思うように業務が捗らなく気持ちが焦りインシデントにちながないか心配。ご本人の「ストレングス」を活かした計画を立てられるかも難しく思ってしまう	今回の介護過程の展開により、アセスメントをし、個別援助計画書を作成することで、職員間での支援方法が共有しやすくなったと思った。根拠のある支援の実施もしやすくなった。		利用者を様々な視点で見ることができた 逆に少ない情報で判断し、支援していないか反省があった	
	「できないこと」に目を向けがちですが、その人のできること、したいこと着目することは、できないことを伸ばすことよりも、利用者本人にとってやりがいがあり、伸びしろが大きいと思う			